

調査報告 福島町茶屋峠台場及び七飯町峠下台場の調査

2.1 はじめに

本報告は箱館戦争戦跡調査プロジェクトが実施した福島町茶屋峠台場（仮称）及び七飯町峠下台場の調査結果である。

2.2 遺跡の位置と環境

茶屋峠台場は松前半島南西部、松前城の北東約17km、五稜郭から南西に約50kmのところに位置する。五稜郭から松前へ抜ける交通路上である。

峠下台場は亀田半島の付け根付近、大沼の南1kmの山中、五稜郭から北へ約19kmのところに位置する。森町から五稜郭へ抜ける交通路上である。



図2.1 箱館戦争関係遺跡と調査地点

2.3 調査の方法

iPadを利用したLiDAR計測を行った。使用したLiDARアプリケーションはScaniverseである。調査対象領域の中央にメジャーを張ってこれを基準線とし、メジャーの0mを基準点とし、スマートフォンのGPSを使用して位置計測した（図2.2）。オリエンテーリングコンパスを用いて基準線の方位角を計測し、磁北は西偏9度で補正した。計測領域内に標識を設置し、基準線を利用して位置計測及び基準点標高からの水準測量を行った。基準点標高は、国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル（10mメッシュ）の代表点の値を使用した。



図2.2 標識の位置計測

ScaniverseからOBJ形式で計測データを出力し、Cloud-Compare（version2.11）で幾何補正を行った。CloudCompareからGeoTIFF形式のDEMをエクスポートし、QGIS（version3.28）上で地形図作成を行った。なお、段彩図は1cmメッシュDEMを使用し、等高線生成には10cmメッ

シュ DEM を使用した。等高線生成用の DEM は平滑化処理^{*1}を 2 回行った。

断面図作成には QGIS の Profile Tool を利用した。

2.4 福島町茶屋峠台場

2.4.1 台場の概要

明治元年 10 月に旧幕府軍の松前侵攻を防ぐために松前藩が築造したとされる（福島町史編集室 1995, p533）。松前藩は茶屋峠頂上付近に胸壁を築き、300 匋砲 2 門を備え付けたという（松前町史編集室 1992）。11 月 2 日に旧幕府軍と松前藩の戦闘が行われ、松前藩は蠣崎民部ほか 300 人あまりの兵力を配備して旧幕府軍を待ち受けていたが、まともな抵抗もなく退却した（須藤 1996: p285、大山 1968: pp. 708-709）。

2.4.2 周辺の地形

茶屋峠台場は福島町の知内川中流から兵舞川へ抜ける標高約 220m の尾根の鞍部に位置する。松前と函館を繋ぐ旧道で、松前街道として知られるルートである。尾根の左右は急峻な崖である。

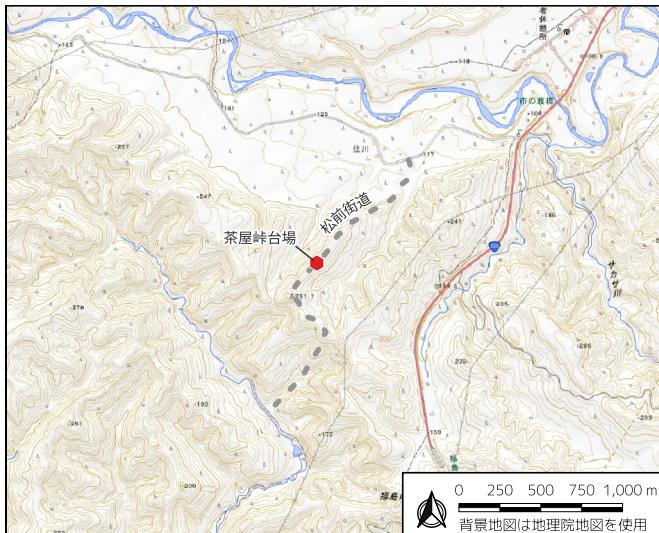


図 2.3 茶屋峠台場と松前街道

2.4.3 遺構の状況

砲台跡とされる地点は松前街道の通る尾根上である。尾根の南側に両側を溝状に掘りくぼめた高まりがある（図 2.4・2.5）。性格は不明であるものの、人為的な所産である。溝の底面から高まり頂部までは約 1.5m である。土壘などの構造物は確認できない。



図 2.4 茶屋峠台場全景（北東から）

2.4.4 まとめ

茶屋峠は明治元年に旧幕府軍の攻撃に備えて松前藩が胸壁を築いたとされ、地元においてもそのように伝承されている。松前藩が旧幕府軍の侵攻に先立ちこの周辺に兵力を集めていたことは複数の記録によって確認できるが、今回の調査では明確な野戦陣地の痕跡を確認することはできなかった。唯一人為的な構造物と判断した高まりと溝についても箱館戦争との関わりは不明である。

^{*1} 平滑化処理は GRASS GIS (version7.8) の r.map.calc コマンドを利用して任意のメッシュとその周囲合計 9 メッシュの平均を算出した。

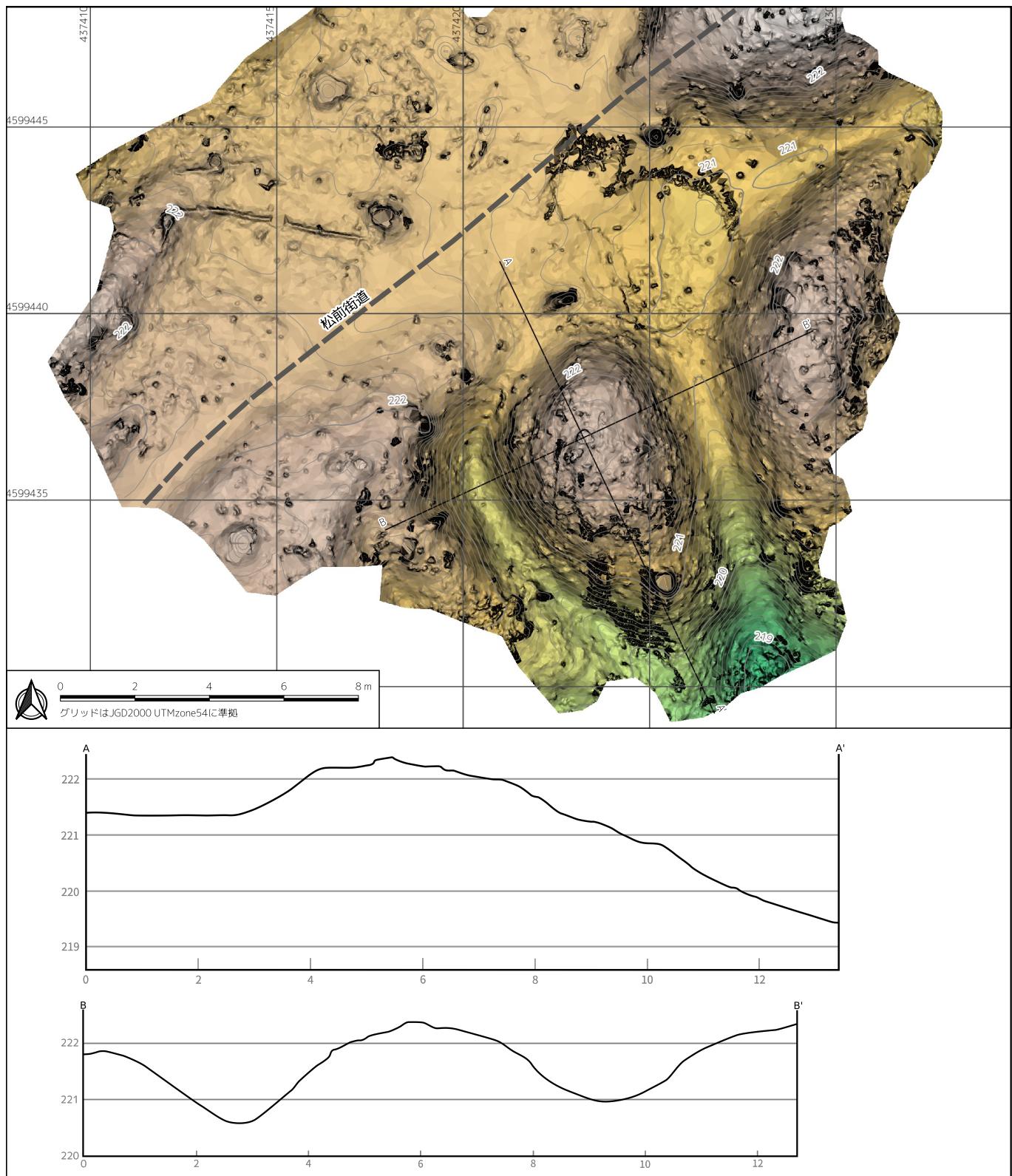


図2.5 福島町茶屋峠台場測量図

2.5 七飯町峠下台場

2.5.1 台場の概要

峠下台場は長川清悦によって昭和48年に発見され、簡易な測量図が作成された（長川 1993）。その後、八巻孝夫により縄張り図が作成された（八巻 2017）。八巻は弘前藩士の残した『楠見日記』を引き、ブリュネが直接指導して構築した可能性が高いとともに、この南西の峠や東側の363峰にも防御施設が存在する可能性を指摘している（八巻前掲: p115）。

2.5.2 周辺の地形

峠下台場は大沼の南側、横津岳や七飯岳から北西に延びる尾根上の345m峰山頂に所在する（図 2.6）。台場のある尾根を西側に回り込むように七飯古道が通る。台場は七飯古道及び大沼方面に対して良好な視界を有する。



図 2.6 七飯町峠下台場の位置

2.5.3 遺構の状況

東西約29m、南北約20mで周囲に土塁がめぐる（図 2.8）。残存する土塁の頂部から内部平坦面の比高は約1mである。土塁外に溝状の遺構が確認できることから、土塁内を掘削し、掘り上げ土を盛土して土塁としたものと想定される。南北軸に線対称な形状で、北側に3つ、南側に4つ、合計7つの突出部を有する。aとcの突出部は土塁内部の平坦面よりも一段高くなっている。また、hにはL字形の土塁（断面C-C'）がある。

2.5.4 まとめ

峠下台場の平面形状は長川や八巻の作図によって知られているものと大きな違いはない。aとcは土塁内部の平坦面よりも高く構築されていることから、砲の設置を想定していた可能性もある。



図 2.7 調査風景

参考文献

- 大山柏 1968『戊辰役戦史』下巻, 時事通信社
 須藤隆仙 1996『箱館戦争史料集』新人物往来社
 長川清悦 1993「旧古峠台場発見と関連土塁 その歴史と意義について」『長川研究』第6号, pp. 1-8
 西山洋 2017『北海道道南の陣屋と台場』茨城城郭研究会
 福島町史編集室 1995『福島町史（第二巻）通説編』上巻, 福島町
 松前町史編集室 1992「北門史綱 卷之九」『松前藩と松前 松前町史研究紀要』第34号, pp. 54-93
 八巻孝夫 2017「箱館戦争の台場一道南・東部と函館周辺の野戦築城を中心にー」『中世城郭研究』第31号, 中世城郭研究, pp. 102-126

石井淳平（箱館戦争戦跡調査プロジェクト）

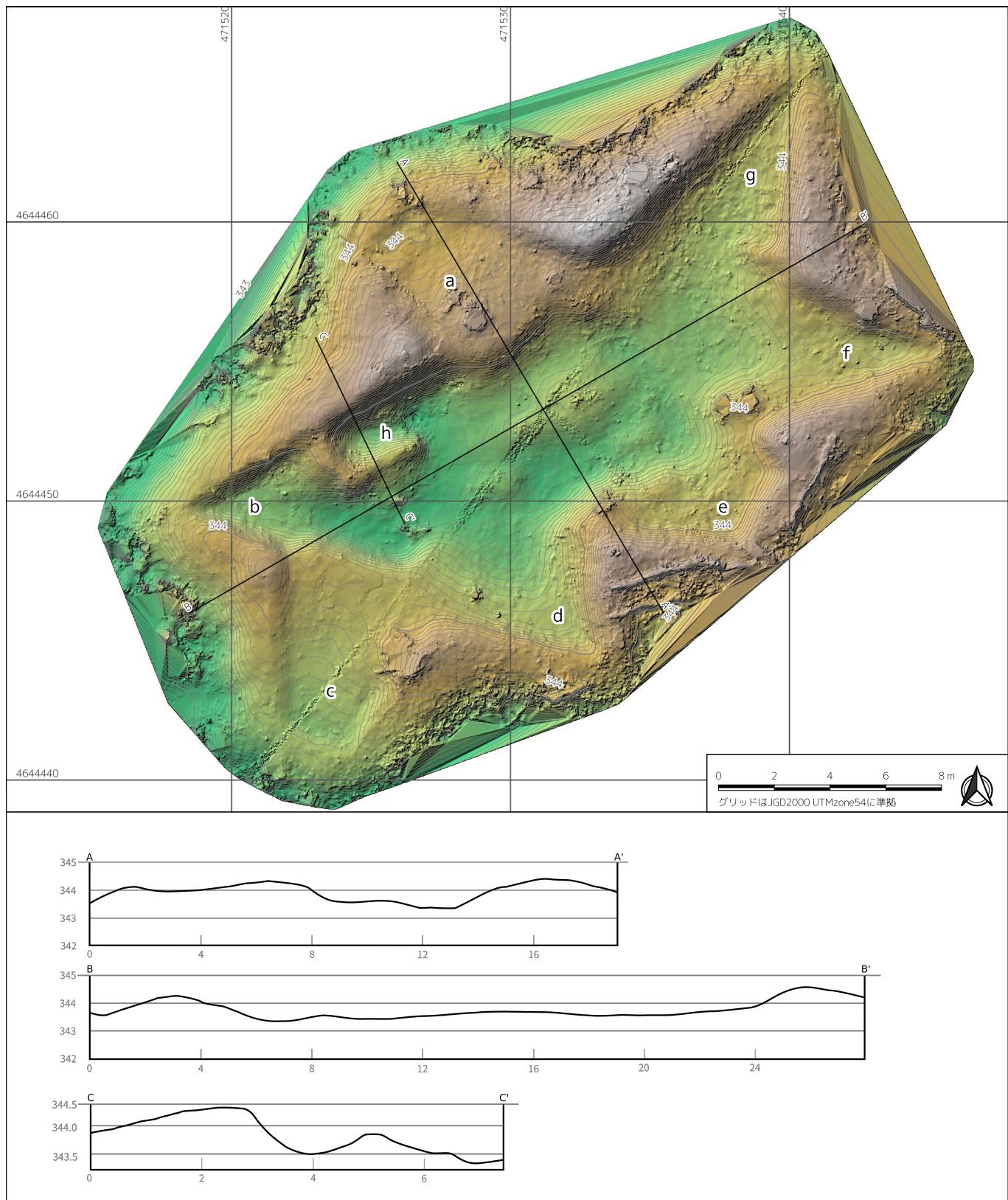


図 2.8 七飯町峠下台場測量図